〔東京家政大学研究紀要　第41集　(1), p.167～176, 2001〕

オットー・グロース伝(3)

－フリーダ・ウィークリーとの往復書簡－

倉持　三郎

(平成12年10月5日受理)

A Biography of Otto Gross: Part 3

The Otto Gross—Frieda Weekley Correspondence

Saburo KURAMOCHI

(Received on October 5, 2000)

キーワード：オットー・グロース，フリーダ・ウィークリー，フリーダ・ロレンス，D.H.ロレンス
Key words：Otto Gross, Frieda Weekley, Frieda Lawrence, D.H.Lawrence

序

これまで，2度にわたってオットー・グロースの生涯について書いてきたが，今回は，主にフリーダ・ウィークリー(ロレンス)との関係について述べたい．とくに，往復書簡にあらわれた，ふたりの関係を見てみたい．

1907年の春，グロースは，ひとりの女性に会った．この女性に強くひかれ，恋文のなかで，「未来の女性」と呼んだ．グロースは，この女性が，自分が抱懐していた未来の女性像を体現していると思った．他方，その女性もグロースのひたむきな理想追求に感動し，自分の生き方の指針を得たのである．この女性が，フリーダ・ウィークリーであった．のちに彼女は，D.H.ロレンスに会い，結婚するが，グロースについて彼に伝え，グロースの存在は，ロレンスの中で重要な位置を占めることになった．

フリーダについて，これまでも書いてきているが，今回は，ややくわしく，その少女時代と，ウィークリーとの結婚生活について述べ，最後に，1907年の春から約1年間にわたって，グロースとフリーダの間に交わされた書簡に触れたい．これまでの記述となるべく重複を避けるようにしたい．[1)]

1　リヒトホーフェン家の家系

フリーダ・リヒトホーフェンは，1879年8月11日に，当時はドイツ領であったメッツに生まれた．(1956年死去)誕生の時のフルネームは，エマ・マリア・フリーダ・ヨハンナ・フライン・フォン・リヒトホーフェンである．3人姉妹の2番目で，姉はエルゼ(1879-1973)で，妹はヨハンナ(1882-1971)である．[2)]

父，フリードリッヒ・フォン・リヒトホフェンは，1845年に高地シレジアで生まれた．

父の先祖は，1521年に，ベルリン近くのベルナウで生まれたパウル・シュルツハイスにさかのぼることができる．彼は相当な社会的地位に上った．彼は名前を2度変えた．最初は，シュルツハイスをラテン語化して，スクルテツスとした．フリードリッヒ，および，ジギスムント両侯爵の政治上，法律上の顧問になったとき，この名前は，これ程の高い地位にはふさわしくないと考えて，パウルス・プリートーリウスと変えた．彼は枢密顧問官の称号を持ち，3つのかなり広い領地の所有者であった．

彼は，友人のルーテル派の信者の息子，サミュエル・シュミットを養子にした．サミュエルは，後に，ブランデルブルグ州のフランクフルト・アン・デル・オーデルの市長となってプリートーリウス家の家名を上げた．その息子のトバイアス・プリートーリウスは，シレジア州に移住して，ボヘミア王に仕えた．30年戦争で没落したが，家運はまた上り坂となり，1661年に，トバイアスの長男のヨハンは，ボヘミアの貴族に叙せられ，プリートーリウス・フォン・リヒトホーフェンと名乗った．このヨハンが，フリーダの曾祖父の曾祖父である．

文学部英語英文学科　第2英文学研究室

リヒトホーフェン家は分家したが，そのなかで，フェルディナント・フォン・リヒトホーフェン(1833-1905)は，後世に知られる人物である．彼は，地質学者で探検家であった．地質学者として，プロシャの探検家に加わり，1860年から72年にかけて，日本，中国，タイ，インドネシア，フィリピン，インド，カルフォルニア，ネヴァダから，また，帰路，中国，日本を調査旅行した．下僕兼通訳のひとりのベルギー人をともなって，中国の18の中心的省のうちの13省を探検し，観察し，記録した．その成果を『旅行の成果と，それに基づく研究』(1777-83)として刊行した．1875年，ボン大学の地質学教授となり，83年には，ライプニッツ大学，86年にはベルリン大学教授となった．

分家のひとりオズワルト・フォン・リヒトホーフェン(1847-1906)も後世に知られる人物である．外務大臣，フォン・ビューローの補佐をして，後その後任として，プロシャの外務大臣になった．フリーダは，オズワルトの客として，数カ月，ベルリンで過ごしたことがある．

リヒトホーフェン家の主な領地はシレジアにあった．12世紀にドイツの移住者が入植した，オーデル，ナイセ両河と，ズデーテン山系に囲まれた地方で，現在ではポーランドの一部になっている．所有地はブレスラウ町の付近にあり，2万エーカーを下らぬ肥沃な土地であった．住民の多くは新教徒であったが，リヒトホーフェン家の多くは，カトリック教徒であった．

目路のかぎり広がるリヒトホーフェン家の土地には，小麦，大麦，砂糖ビートが栽培された．1747年にベルリンの科学者，マルグラッフが，ある種の砂糖ビートには，西インド諸島の砂糖キビと同じ位の砂糖がふくまれていることを発見すると，にわかにビートからの砂糖の生産が起こった．

1802年に，マルグラッフの弟子のフランツ・カール・アハルトが，世界最初の砂糖ビート工場をシレジアに建設した．これが経済的に利益をもたらすのは，ナポレオン戦争で，1806年にナポレオンが大陸封鎖令を出して，イギリスを大陸市場から閉め出そうとしたときである．封鎖令によって，当時，全世界の砂糖の需要を満たしていた西インド諸島からの砂糖が大陸に輸入されなくなり，砂糖の値段は高騰したからである．砂糖ビートによる砂糖生産はブームとなった．

このブームに乗ろうとした地主のひとりが，フリーダの曾祖父のルドウィッヒ・フォン・リヒトホーフェンである．最初のうち，彼は，砂糖ビート生産によって利益を得たので，すべての財産を砂糖ビート生産に賭けた．しかし，これは失敗であった．ナポレオン戦争が終わり，西インドから安い砂糖が大陸に輸入されるようになると，シレジアのビート砂糖は見向きもされなくなった．ルドウィッヒには，砂糖ビートの根と借金しか残らなかった．彼は息子のヨハンと投機に走ったが，利益は得ることはできなかった．

ヨハンは，ドイツ・ポーランド系の貴族の娘，アマリー・ルイーズ・ラスツォウスカ(1811-60)と結婚した．アマリーの父は，シュタインとレシュチンの領主，カール・フォン・ラツォウスカであり，母の結婚前の姓は，スクレベンスキーである．(D.H.ロレンスはのちに『虹』でスクレベンスキーという名前を使うことになる．) フリーダも，その姉のエルゼもこの祖母を，ラツォウスカ伯爵夫人と記憶している．1845年の夏，高地シレジアのラショーワの領地で男児が出生した．これがフリーダの父，フリードリッヒ・フォン・リヒトホーフェンである．

2 フリーダの父と母

フリードリッヒは，1862年，17歳のとき，職業軍人になり，士官候補生になった．この年に，軍備拡張に賛成していた保守党が選挙で大敗を喫した．軍事力拡大をははかる皇帝，ウィルヘルム1世は，議会を抑えるためにビスマルクを宰相に任命した．ビスマルクは議会と対決し，「ドイツの問題は演説や多数決ではなくて，鉄と血で解決されねばならぬ」と演説し，いわゆる鉄血政策を取り，武力による解決に驀進した．反対する議会を抑えて，軍備拡張を目指した．

ビルマルクは長年の懸案であったドイツ統一に向かって，まず1864年にデンマークを破り，1866年にオーストリアを破り，北ドイツからオーストリアの勢力を駆逐して，北ドイツ連邦を強固にした．さらに，1870-72年の普仏戦争で，統一を妨害するナポレオン3世のフランスを破り，アルザス，ロレーヌの2州をフランスから奪い，南ドイツに4州を加えて，ドイツ帝国を成立させ，ドイツ国民長年の宿望であった統一国家を形成した．

ビスマルクの鉄血政策のもとでフリードリッヒは活躍した．彼は1870-72年の普仏戦争に参加して，フランスの要塞ストラスブルグを攻撃した．父の死後，フリーダが発見した日記には士官の日常生活が記録されている．1870年7月の開戦，1871年1月のパリ開城，ストラス

ブルグ攻略が記録されている.戦闘の模様，雨と雪のなかの一日中の行軍，しばしば喧嘩で終わる酒盛り，決闘，自殺と葬式が記録されてある.

71年元旦に日記は終わった．フリードリッヒは負傷して,捕虜になった．捕虜の時期は短かったが，右手の負傷はなおらず，障害が残り，軍人の生活は終わりになった．中尉で鉄十字章をもらって予備役となった．彼はまだ25歳であった．そのあと，新ドイツ地区を統治する民政官になった.

そのとき，フリードリッヒの父は70歳であったが，彼は父のいるシレジアに戻る気持ちはなかった．戦争の結果，新領土になったメッツに移住して結婚した．妻は，アナ・マルキエルで名前が示すようにフランス系であった．母は黒い森地方の町，ドナウエシンゲンのブルジョアの家族の出身である．その先祖はフランス革命のとき，逃がれて黒い森地方に住みついた.

3 フリーダの姉，エルゼ

フリーダの姉，エルゼは傑出した女性であった．メッツに生まれたエルゼは17歳の時，学校の教師になり，妹のヨハンナを教えた．妹だからといって容赦しなかった．教師をしながら大学へ行く学資をためた.

エルゼは友人のフリーダ・シュロッファーを通して，彼の伯父で，フライブルク大学の哲学の教授であるアロイス・リールを知り，その関係でマリアンヌ・ヴェーバーを知った．エルゼはマリアンヌとともに，ヴェーバーの最初の女子学生であった.[3]エルゼの博士論文は，1869年からのドイツの政党の労働者保護への姿勢の変化の研究であった.[4]

エルゼは，将来，工場の調査官になる希望をもっていた．女性労働者の労働条件を守るためであった．ヴェーバーが尽力して，その希望をかなえてやった．彼女は1900年にカールスルーエ地区の工場の調査官になった．しかし，周囲の期待を裏切り，まもなく調査官をやめてしまった.

エルゼは，マックス・ヴェーバーの弟のアルフェレート・ヴェーバーと親しい間柄となり婚約した．しかし，1902年にエルゼはエドガー・ヤッフェと結婚した．ヤッフェ家はユダヤ人で資産家であった．エドガーは経済学者であった．エルゼはヤッフェを愛しておらず，この結婚は多分に経済的理由によるものであった．エルゼは妹たちや両親のためを思って結婚したのだった．ヤッフェはハイデルベルクに4階建ての立派な邸宅をつくった.

ヤッフェは，1904年にイギリスの銀行制度研究で教授資格を取得して，それを公刊し，同年に学術雑誌『社会学と社会政治学論叢』の発行権を買収した.[5]これを編集することで，一時ノイローゼになっていたヴェーバーは研究活動に復帰した．彼は,この学術誌を中心に活動することになった.

4 フリーダの少女時代

フリーダは,姉のエルゼとは違って，勉強は好きではなかった．彼女は，子供のころ，麦藁色の髪の毛を逆立て，日に焼けて，越えられそうもない溝を飛び越えようとして落ちて膝をすりむいているような，お転婆な女の子であった.

3人の娘のうちで一番きれいなのは，末のヨハンナであった．客は，いつもヨハンナをほめた．そばでフリーダはしかめつらをしていた．客は，フリーダを見てもなにも言わなかった．するとフリーダはもっとひどい顔付きをするのだった.

フリーダは姉のエルゼと仲がよかった．エルゼもまた妹思いであった．1890年2月4日の，メッツからの姉エルゼへの手紙には次のようにある.

> 今私はクロシェイがうまくできるのよ.あなたのお人形さんにドレスをつくってあげたわ.[6]

フリーダは16歳のとき最初の恋愛をした．シレジアの遠縁にあたるクルト・フォン・リヒトホーフェンである．1898年2月11日の，姉，エルゼあての書簡に彼についての言及がある.

> 今日，ここにだれが来たか，あてて見てちょうだい．私の初恋の人，クルトなのよ．昔と変わらなかったわ．とてもおかしかったわ.[7]

次の恋人はカール・フォン・マルバール中尉であった．この場合はもっと真剣なものであった．彼は結婚まで考えたが，フリーダに財産がないのであきらめた．当時，将校の地位を保つためには，かなりの財産が必要であった．下層階級のものが将校になることを防ぐためであった．フリーダには，そのような財産がなかったので，中尉は結婚をあきらめた．後年,中尉は,思い切って結婚し

なかったことを後悔した.

フリーダの父親が娘たちにむかってよく言っていた冗談があった.「おまえたちは,だれとでも結婚してよいが,ただ,ユダヤ人,イギリス人,賭け事師とは結婚するな」ところが,皮肉にも,3人の娘たちは,父親が禁じていた種類の男たちと結婚してしまった.一番上のエルゼは,ユダヤ人と,フリーダの2人の夫はいずれもイギリス人,そしてヨハンナの結婚相手は,賭け事に夢中になっているドイツ士官であった.

5　フリーダの結婚

1899年,フリーダ・リヒトホーフェンは,イギリスの言語学者,アーネスト・ウィークリー(1865-1954)と結婚した.

ウィークリーは1865年4月28日,ロンドンのハムステッドに生まれた.ハムステッドは,当時は,小さな町であった.父親のチャールズ・ウィークリーは,この町の救貧委員で,母親のアグネスは大ロンドン西部の古い町,アクスブリッジの有力者で,教師や教区役員を務めたジョージ・マッカウエンの娘であった.

この中産下層階級の家庭に,ウィークリーは9人の子女の次男として生まれた.長男が夭折したあとは,跡取りとして,一家の期待をになうことになった.

経済的に恵まれなかったが,幸い,父方の叔父で,のちにコルチェスターの聖堂参事会員になったアルフレッド・ボールデンが寄宿学校を経営することになったので,この学校に授業料免除で学ぶことができた.ウィークリーはこの学校で,語学と数学に抜群の才能を示し,17歳で,この学校の教師になった.勤務のかたわら寸暇を惜しんで勉強を続け,ロンドン大学文学士資格試験に合格した.これは当時の制度で,試験によって文学士の称号を与えるものであった.学資を得て,スイスのベルン大学に1年間学んだあと,1892年にロンドン大学から,フランス語とドイツ語で修士号を得た.ついで93年,眠る時間を惜しんでの猛勉強の結果,ケンブリッジ大学トリニティ・コレッジに入学,中期英語と近代語を専攻し,3年後に,優等の成績で卒業した.なおもパリのソルボンヌ大学と,ドイツの南部のフライブルグ大学に学び,97年から1年間,フライブルグ大学で英語の講師になった.ここで,彼は,『ドイツ語語源辞典』の著者で,ドイツの大言語学者である,フリードリッヒ・クルーゲの講義を受けることができた.のちにウィークリー自身も,『英語語源辞典』を編纂することになった.1898年,34歳のとき,ノッティンガムのユニヴァーシティ・コレッジのフランス語教授に就任した.

イギリスに帰る前,ドイツの黒い森地方で休暇を過ごした.そのとき,たまたまフリーダを知り,プロポーズして受け入れられたのである.このとき,フリーダは,その地方の一種の花嫁学校である寄宿学校,アイヒベルク学舎の経営者,ブラス姉妹と休暇を過ごしていた.[8)]

ウィークリーはフリーダより14歳も年上であった.これだけの年齢の差があるのにどうして結婚する気になったかと言えば,フリーダが『回想』のなかで書いているところによると,「人生ではじめて,しっかりした大地の上に立つ気持ちになった」[9)]からである.大学の教授といえば,ドイツでは,立派な社会的地位を約束するものであった.イギリスではドイツ程の評価を受けていないことを,フリーダは知らなかった.苦学したことも,彼女の心に訴えた.「彼は家庭での貧乏との戦い,両親の相互の無私の献身,10人の子供たちについて語った」

彼女は,ウィークリー家が貧乏であっても堅実であり,家族の結びつきが強いこを感じた.彼に比べると,これまで交際した,ドイツの軍人たちは軽薄に感じられた.34歳のウィークリーは,フリーダを心から愛した.森の中で逢い引きしたとき,彼女の汚れた靴にキスをした.彼女は虚栄心をくすぐられた.他方,彼が思っているような理想的な女性でないことを感じて不安であった.しかし彼の考えているような女性になろうとした.

ウィークリーはフリーダの何にひかれたか.もちろん,彼女の魅力を否定するものはいないだろう.それまで,彼女にひかれた男性,このあと,彼女にひかれた男性が多数いたことを思えば,彼女が男性をひきつける魅力をもっていたことは否定することはできない.そういう魅力のほかに,ウィークリーにとっての魅力は,彼女がドツイ人だということであったろう.フランス語とドイツ語などの近代語の研究者として,ドイツ生まれでドイツ語を話す女性は妻としてふさわしかった.

ウィークリーは,これまで,勉学一途で,女性との交際の余裕はなかった.また,欲望を押さえる禁欲的な考えもあった.性はウィークリーにおいて抑圧されていた.イギリス中産階級の禁欲的な態度の現れである.フリーダは期待したような喜びを得ることができなかった.フリーダは,かつて,自分の汚れた靴にキスをしてくれたように自分の素足にキスをしてくれることを期待した.

ルツェルンでの初夜，ウィークリーはベッドに入る前に飲みに行った．その留守の間にフリーダは，戸棚の上にのぼった．ウィークリーが戻ってきたとき，部屋にだれもいないのを知り，びっくりした．その様子を楽しんだあと，彼女は戸棚の上から降りて，裸で彼の前に立った．ウィークリーは着るようにと言った．そして，大きなベッドに入った．フリーダにはベッドが地面のなかに沈んでいくような感じがした．

2時間後，寝室を出て，バルコニーに立ったフリーダはみじめであった．バルコニーから下にとびおりて死んでしまいたい気持ちであった．彼女が絶望しているあいだ，ウィークリーは眠っていた．どうしようもない怒りで彼女はベッドの上で足をばたつかせた．

6 ノッティンガムに住む

フリーダは，夫についてイングランド中部地方の中心都市であるノッティガムに住むことになった．この都市は，北部ドイツからイギリスに侵入してきたサクソン人たちが住みついたころ，スノティンガムとよばれていた．868年に，侵入してきたデーン人によって占領されたが，918年にエドワード・エルダーが奪回した．920年にはじめて，そこを流れるトレント河に橋がかけられた．

1066年にイギリスに侵入したノルマン人は，ここに城を築き，その後，国王の居城のひとつとなった．17世紀の清教徒革命で，国王と議会軍の戦争がはじまると国王チャールス1世は，はじめ，この城に立てこもった．国王軍が去ったあと，ハッチンソン大佐が指揮する議会軍がたてこもり，数度にわたる国王軍の攻撃を撃退した．国王が処刑されて，皇太子のチャールス2世が国外にのがれると，大佐はこの城を破壊させた．

ノッティンガムは18世紀の中頃から，急速に繁栄した．それは，繊維産業の興隆によるものである．1589年，カルバートンのウィリアム・リーが，靴下編み機を発明した．1812年までには，2600の靴下編み機が使用された．1768年には，ジェームズ・ハーグリーヴズが，糸紡ぎ機をノッティンガムにもたらし，翌年には，アークライトが最初の糸つむぎ工場をここに作った．ここでの繊維産業の隆盛に目をつけたのである．機械の導入にたいする反発もおこり，ラダイトの工場破壊運動も起こった．

1750年には，人口は約1万1千人であったが，18世紀の末までには，2万9千人になり，1831年には，5万人にふくれあがった．

19世紀にはいると靴下製造業は下火になった．男性が靴下のかわりに長ズボンをはくようになったからである．この靴下産業の不況を救ったのがレース産業である．1808-9年の，ジョン・ヒースコートのレース編み機の発明やその他の製造技術の革新によって，この都市は急速に発展した．

フリーダが結婚生活をはじたのは，こうような産業都市であった．文化的に点でフリーダの期待を裏切るようなことがあったかも知れない．ミュンヘンのような革新的な都市と比べると平凡であると思ったであろう．しかし，フリーダは結婚後しばらくは主婦として平穏な静かな生活を送っていた．表立って，とくに不満があるわけではなかった．

1899年12月15日の，父母，姉妹あての書簡では，フリーダは，クリスマスプレセントを送ることと，第一子を妊娠したことを伝えている．[10)]

おかあさんには，テーブルクロス，ヌッシ(ヨハンナ)には，スカート，それにレースはブラウスに役に立つでしょう．アルティはレースでドレスを飾ることでできるでしょう．

（中略）

私は，おじいさん，おばあさん，おばさんの気持ちになってもらいたいためにお話したいことがあったのよ．来年は家族が3人になるのよ．生まれる子は，お父さんに似てほしいの．お母さんのようにお馬鹿さんにならないで．

1899年12月21日のエルゼあての書簡では，第一子を妊娠したことを伝えるとともに，姉にしか言えないような寂しさももらしている．

お姉さん，来年のクリスマスには，小さい姪か，小さい甥か分かりませんが，ウィークリー家の子に贈り物を送ることができますよ．とてもかわいい赤ちゃんを願っているのよ．夫はやきもちを焼きそうだと今から心配しているのよ．でもだれにも言わないでね．とても神聖なことなので，だれにもゴシップの種にはされたくないのよ．2日前からハムステッドに来ているの．夫と一緒ではありません．ここの空気は私にはとてもいいわ．ノッティンガムでは，ひとりぼっちのことが多いのよ．夫は，週に3日，夜学で労働者学級で教え

ているわ.

1900年7月4日のエルゼあて書簡では,生まれた男児に「モンタギュー・カール・リヒトホフェン」という名前をつけたいと言っている.

メッツから出された1901年6月13日のエルゼあて書簡でには，こうある.

とても気前のよい贈り物を感謝しています．今日，この上ない贈物として，美しい品物が来ました．ブラウスがふたつできます．もう一方の方は，お姉さんのためにつくります．それを着て頂戴．もし着ないなら私にください．白いレースをつけて,冬服になります．パーティ用のドレスになります．お姉さんは「贈物屋さん」です.

エルゼは，一番上の姉として妹思いであった．1901年11月25日の姉あての書簡では，調査官としての活動に言及する.

お姉さんの名声を楽しでいます．御活動を知らせてください．バーデンの若いグループからは手紙をもらっていません．いっしょに喧嘩しないで座ることができればよいと思います.

1901年のクリスマスのころの姉あての書簡には，こうある.

シラーについての私の小さい本は，私にとても楽しみを与えました．人びとが，私たち女性を「頭を使う」あらゆることから閉めだすのは卑劣です．あたかも結婚してしまえば頭は不要だといわんばかりです.

フリーダは夫にすすめられて，ドイツの古典を編集する仕事も手伝い，報酬も得ていた．前述の引用はフェミニズムの立場からの発言である．エルゼはドイツにおける女性運動に参加していた．家族はエルゼの学問を評価しない．しかし，フリーダは姉の能力を信じ，姉が内務大臣になるのを期待している.

1901年12月ころのエルゼあての書簡では,来年の9月に第2子を出産する予定であると伝えている．しかし，まだはっきりしないので他言はしないでくれという．エルゼに名付け親になってほしいという．だから，そのころ来てほしいという．結果的には，第2子は,エルゼにちなんでエルザとなづけられた.

ウィークリーはケンブリッジに毎週土曜日に教えに行っている．カールスルーエで姉はさびしいだろうと同情するが，フリーダもまた，同じように,さびしさを感じていたのであろう.

フリーダには，周囲のイギリス人たちは，生活の装飾のほうにばかり気を取られていて，生そのものに関心がなく，生を疎外しているように思われた．これが彼女には納得できなかった．ところが，妹のヨハンナが，眠っていたフリーダの情熱をよびさますことになった.

フリーダは，ノッティンガムを訪問した妹を，鉄道支線の小駅まで出迎えた．列車から降り立った妹をみてフリーダはびっくりした．平凡な中部地方の小駅には，これまでこのようなエレガントな女性は降りたことがなかった．妹は体にぴったり合った，仕立てのよいシェパードチェックの旅行服に身を固めていた．旅行用の帽子，靴，手袋,すべて申し分がなかった．フリーダの姿を認めると，それまでの威張った風の歩き方をやめた.

質素な白い服を着たフリーダは，妹の衣服を観察した．一点も非の打ち所もなかった．しかし，以前のように美しかったが，かつて夢見るようなまなざしや新鮮な感じが失せていた.

「お姉さんは今の生活に満足しているの？ 欲しいものは全部手に入ったの?」妹は遠慮なく聞いた.
「そうね，全部．でも，分かるでしょう．努力しているのよ……」フリーダは口ごもった.[11)]

ノッティンガムに来たヨハンナは姉にむかって，自分の浮気な生活についてしゃべったあとで，そう聞いた．この妹の言葉だけで動いたわけではなく，そういう時期になっていたのであろうが，フリーダは，この言葉を聞いて，情熱をよび覚まされた.

フリーダは近くのニューステッド・アベイを訪ねた．ここは希代の蕩児，バイロン卿の屋敷であった．彼女は，この自由奔放で華やかな生涯を送った詩人バイロンのことを思った.

生活の単調さに退屈したフリーダは，夫に隠れて情事をもった．その相手はノッティンガムの高級住宅地に住む，レース製造業者，ウィル・ダウソンであった．彼は,

自動車を最初に所有したイギリス人のひとりであった．その車で，フリーダをドライヴにさそった．フリーダは「生き返ったように感じた」彼女は，型にはまった中部地方の生活の退屈さを意識するようになった．こういう気持ちになったときに彼女の運命を変えるきっかけになるひとりの男性が現れた．オットー・グロースという男性であった．

7 グロースとフリーダの往復書簡

1907年の春，姉，エルゼを訪ねてミュンヘンへ行ったとき，フリーダはグロースにはじめて会った．すぐに，このフロイト派の心理学者にひかれ，愛し，関係をもった．それ以前に，エルゼもまた，グロースにひかれ，彼を愛して，グロースの子を妊娠し，生むことになった．

帰国するフリーダを送り，グロースはいっしょに連絡船でドーヴァー海峡を渡り，イギリスへ行った．そのあと，ミュンヘンからグロースは，ノッティンガムにいるフリーダに恋文を送った．差出し人には，義兄のエドガー・ヤッフェの名前を使った．グロースの手紙を，すべて焼却するように言われたが，フリーダは捨てるに忍びず，保存しておいた．仲介者のヤッフェにフリーダは，1907年5月20日付けで，次のように書いている．「私は，ミュンヘンからの手紙を全部焼却すると約束しました．でもできないのです．約束を反故にさせてください．まだ，幾通かもっています．でも用心します」

後日談になるが，このグロースからの手紙は思わぬ目的に使われることになった．5年後の1912年，フリーダが，D.H.ロレンスを愛し，同棲し結婚を決意したとき，夫，ウィークリーに離婚を承知させるために使われた．自分はこれほど，夫を裏切ってきたという証拠にするためであった．

焼却しなかった結果，現在，グロースからフリーダあての14通と，フリーダからグロースあての4通を読むことができる．日付は入っておらず，完全にはその順序を確認できないが，内容から判断して，おおよその時期，順序は分かる．一応，グロースの書簡は，A～Pという順序がつけられており，フリーダからのものは，Q～Tとなっている．[12] それに従いながら，内容を見てみたい．

A　グロースからフリーダへの最初の恋文である．いかにも最初の手紙らしく，グロースのあふれる気持ちが伝わってくる．フリーダを「未来の女性」と呼ぶ．彼は，社会の因習に束縛されない自由な生き方をする女性を夢みてきたが，フリーダこそ，まさにそのような女性だというのである．

> 君を通して，ぼくの力のすべてがよみがえったことを自覚する．君は，実体のない夢だったもの，ぼくの苦闘と希求のなかの夢想であったものを，ぼくの想像力のなかだけに生きていた「未来の女性」の予言的夢を「彩色し生命を与えて」ぼくに示し，与えてくれたのだ．これまで，可能性であるにすぎなかったもの，肉体に宿るとは，ほとんど期待しなかったものを，現実に見て愛したのです．

そう言いながら，他方，エルゼへの愛を断ち切らない．「今エルゼと一緒にいます．愛は深く，悩みも深いのです．これまでにないように彼女を愛するようになりました．これまでないように．彼女のまじめさを理解しています．彼女は偉大で高貴で，あなたを暖かく，心から愛しています．嫉妬の危険など全然ありません・・・．」

B　フリーダからの返事がないので，電報でよいから，返事をくれるようにと懇願している．グロースの住居，ミュンヘンのテュルケン通81番地か，仲間とたむろしている，カフェ・ステファニにあててくれと言う．「連絡船上でのある夜以来，不安はもはや入る余地はありません」とあるところから，イギリスに帰国するフリーダを送って，連絡船でドーヴァー海峡を越えたことが分かる．しかし，続けて書く．「ただ君について心配しているのです．未来と対決する勇気があるかと．君の住む所一面を，灰色の冷たい生活でおおい，窒息させる「矮小さ」と戦うだけの力を君が持つかどうか心配なのです」

ここで，グロースは，ノッティンガムでの平凡な生活は「矮小」だと決めつけ，そこから離れるように言う．この言葉はきわめて予言的で，このときは，フリーダはそこを離れることはなかったが，5年後，ロレンスとともに出奔することになった．この手紙は，フリーダに未来の生き方を指示することになった．グロースの言葉に従って，彼女は自ら「矮小さ」を否定したのである．

C　フリーダからの電報がとどいたと述べている．フリーダが，Bでの要請に応えたものであろう．「ため息のように，何と暗いことか．フリーダよ，ぼくのところへ来てくれ．待っている」とある．フリーダの電報には，

自由にはなれないとあったのだろう．グロースは，ニーチェの『ツァラツストラはかく語りき』中の「結婚と子供」に言及する．「かつて創造した人達よりも，さらに高い何物かを創造しようとする二人の意志…，ぼくが結婚とよぶものはこの意志だ．」フリーダに自分の子供が生まれることを期待している．

「ぼくたちの行く手」に「南十字星」があるという言及は，グロースの南米航路での体験を踏まえている．

この手紙が着いたときの感激を，フリーダは『回想』のなかでこう述べている．「ポーラ(フリーダ)は心の高鳴りが外に聞こえないようにピアノを音高く弾いた．鍵盤の上に涙が落ちた，オクタヴィオ(グロース)の所へ行きたいと思った．彼女は彼が示したような輝く生活をしたいと思った」とある．しかし，小さい子供を捨てるに忍びないとある．[13)]

D　この手紙にはモルヒネ中毒の禁断治療への言及がある．ブルクヘルツリ病院で，C.G.ユングが主治医となって，グロースの禁断治療が始まるのは，1908年5月11日である．もし，この禁断治療が1908年のことを指すなら，ここにおくのはおかしい．おそらく1908年5月のときの入院治療とは別なものを指すのであろう．次のEも，Dと同じ時期と考えられる．

E「モルヒネの禁断で，ぼくの頭と心臓は，鉄で締め付けられている」とある．「一般にはほとんど不可能といわれている，この治療をしている」と書く．これを読んでフリーダはどう考えたであろうか．当然，一緒になることに一抹の不安を覚えたであろう．エルゼも，このためもあって離れていく．

F「愛する人よ，あなたがアムステルダムにいらっしゃること，本当に私のところへ来ることが，私の気持ちを驚くほど高揚させます」とある．この「アムステルダム」は，おそらく精神医学・精神病理学国際大会であろうから，すると1907年9月2日から7日である．するとこの書簡は，1907年の夏のころであろう．

G　グロースは妻のフリーデルに言及している．夫婦の関係は冷えてしまった．今，故郷のグラーツにもどっているとう．このころフリーデルは，グロースの友人アナーキストのミューザムと関係をもった．

フリーダは，『回想』のなかで，この書簡の第2パラグラフに，この書簡集にはない，1パラグラフを加えている．こうはじまる．「ぼくは，すべての祝福の瞬間にあなたの魂の豊かさを感じました．とくにあなたの魂が，開花して行くときです．あなたは自由で解放されていながら，でも，あなたの魂は内気です……」[14)]

H　エルゼとの関係が終わたという．1907年に，エルゼは，グロースの子を出産したあと，麻薬中毒のグロースに愛想をつかして，離れていく．

エルゼに「古い友人が現われた」とある．エルゼの気持ちが，この友人に移ったということであるが，この「古い友人」はだれかは特定できない．ハイデルベルク大学関係者であろう．このときは，エルゼはヤッフェと正式に結婚していたが別居していた．「古い友人」は，かつて婚約したことのあるアルフレート・ヴェーバーであろう．

I　エルゼを失ったことへの言及がある．書簡Hに続くものである．妻のフリーデルも自分から離れていく．

J　妻のフリーデルと決別するところである．フリーダは「ぼくの願望のためにぼくを受けいれてくれる唯ひとりの女性です．ぼくの道は孤独な道になりはじめました」愛していた3人の女性のうちで残るはフリーダだけになった．ますます，グロースはフリーダに夢中になる．

K　フリーダから写真をもらった礼を述べている．妻のフリーデルがもどったことを述べる．

L　フリーダがグロースに指輪を贈った．そこには3人の女性が刻まれている．エルゼとフリーダとフリーデルである．

M　エルゼへの言及がある．その関係が「夜」と表現されていることから，二人の間にはトラブルがあったことが想像できる．エルゼと別れて，新しい生活に入れるとグロースは自分をはげましている．

「人生における新しい調和が生まれるのは，常にデカダンスからなのです．われわれが生きるこの時代は「デカダンスの時代」というレッテルを張られてきたが，それは偉大な未来の子宮なのです」

1907年9月の，アムステルダムでの精神医学・精神病理学国際大会で，グロースは「大脳の二次的機能」という題目の研究発表をしたが，それは，1908年に，学会報告として印刷された．そのなかに「創造的デカダンス」という言葉が使われている．

N「ザルツブルクで，フロイト学派の最初の学会が開かれます」とあるが，この学会は，1908年4月27日(月曜日)の一日だけ開かれた．この年の1月18日から20日にかけて，招待状が発送された．したがって，この書簡はこの間のものと思われる．この学会では，グロー

スは研究発表はしなかった．ただ1913年5月14日の『行動』誌に彼自身が書いたものによると，グロースは無意識の発見が，文明の未来にとって重要であるという内容の短い話をしたようである．それにたいして，フロイトはグロースを非難して，医師は革命家ではなく医師としてとどまるべきであると言った．

「ぼくは，衡平裁判所に申し入れることで，エリザベート・ラングを解放する試みをしています．彼女は今，両親によって不名誉にも自由を奪われ，自宅に監禁されているです」とあるが，このエリザベートは，ミュンヘンの彫刻家の娘で，ひどいノイローゼにかかった．グロースが主治医として，治療を試みたが，彼の興味をひいた．なぜならば，このノイローゼは，個性豊かな人間，とくに女性が，強い親の抑圧，規制を受けるときになるケースだからである．父親の抑圧を強く感じていたグロースにとって，自分のことのように感じられたであろう．はじめグロースの治療によって経過良好であったが，1907年の末に両親が彼女を家に監禁した．

グロースは会うことができなくなった．1908年夏，彼女はスイスの療養所に移された．

O 「フリーダよ，あなたが子供のためにとどまるというなら反対することは一言もいいません．しかしあなたが義務だとか義理だとかというほかの理由をいいだすなら，昔ながらのやりかたに戻っているのです．フリーダよ，それは「臆病」から生じた誤りなのです」という．グロースの理想主義が現れている．さらに「自己欺瞞」が一番わるいという．こういうグロースの理想にフリーダは心底から共感したのである．そして5年後に実行する．いかにグロースの言葉が彼女の胸に響いていたか分かる．

P 「ぼくはあなたの最後の手紙を受けとりました」とあるように，最後にフリーダは，グロースのもとに行くこと断念した．そして，その内容の手紙を書いたのであろう．この決意をしたのは，1908年の4月までであろう．

次はフリーダのグロースあて書簡である．グロースの書簡のいずれかに対応するものである．

Q 「あなたは魔法使いですか．私が切望していた真実の情熱の叫び，お手紙が今日届くとは」「私があなたを愛することは，呼吸をすると同じくらい私には必要なのです」グロースの愛に応えるだけの愛情の表現がある．初期のものであろう．

R 「エルゼが今日，愛情のこもった手紙をくれました．あなたの健康のためにオランダのことはあてにしない方がよいと言っています」エルゼは，フリーダがアムステルダムに行くことを引きとめようとしている．

S 1908年の夏，恐らく，7月のものと推定されている．子供たちと一緒に水着姿で海岸にいたとき，田舎の男の子が自分を襲おうとしたので，子供たちのスコップを振り回して追いはらった，自分は「気性の激しいゲルマンの女性」だと書いている．フリーダの気丈な女性としての面が出ている．

「あなたは，私を過大に評価していると思いますが，あなたを幸福にすることであるならば，あなたに楽しみを与えたいと思います．私は何と不幸な女なんでしょう．「型」にはまらなければならないのです」グロースのところに行きたいが，他方，母として主婦としての生活を捨てることはできないと述べる．

T 「あなたを愛します．お会いできることを願います」「死ぬとか死にかかっているとかおっしゃらないでください．もし私があなたの治療の手助けになることがあればどうか二人のためにさせてください」「治療」という言葉から，書簡D，Eの返事のようである．この時点では，麻薬中毒をフリーダは重く見てない．グロースのところに行けないのは，子供が小さいせいである．彼女が子供に執着していたことは，出産当時の手紙を読め想像できる．

結　語

今回はフリーダの前半生と，1907年から1908年にグロースとの間に交わされた書簡を見た．グロースがいかにフリーダを愛し，フリーダがいかにグロースに傾倒していたかが分かる．彼女にとってグロースの言葉は未来の生活の指針になった．5年あとロレンスとともに，夫を捨て家を捨て子供を捨てるのはこの指針に従った行為と読める．ロレンスはフリーダにとっては「グロースの再来」であった．

注

1) フリーダ・ロレンスについて言及したものは，次の通りである．拙著『D. H. ロレンス　小説の研究』(荒竹出版，1976)，『D. H. ロレンス　愛の予言者』(冬樹社，1978)，『D. H. ロレンス』(清水書院，1987)，

拙論「D. H. ロレンスとオットー・グロース — *Twilight in Italy* の問題」(『東京学芸大学紀要』第2部38集, 1987),「D. H. ロレンスのドイツ体験」(『東京家政大学研究紀要』第36集, 1996),「フリーダ・ロレンスとオットー・グロース」(『英語英文学研究』(東京家政大学)4号, 1998),「オットー・グロース伝(1) フロイト, ユング, フリーダ・ロレンスとの関係」(『東京家政大学研究紀要』第39集, 1999),「D. H. ロレンス『恋する女たち』とオットー・グロース」(英語英文学研究』(東京家政大学)5号, 1999,「オットー・グロース伝(2)」,(『東京家政大学研究紀要』40集, 2000),「M. ヴェバー, O. グロース, D. H. ロレンス-- アナーキズムをめぐって —」(『英語英文学研究』(東京家政大学)6号, 2000) ほか.

2) フリーダの先祖についての記述は, Robert Lucas: *Frieda Lawrence* による.
3) Marianne Weber: *Max Weber*, p. 229.
4) Martin Green: *The von Richthofen Sisters*, p., 16.
5) Marianne Weber: *Max Weber*, p. 277.
6) Frieda Lawrence: *The Memoirs*, p. 159.
7) Ibid., p. 160.
8) Robert Lucas: *Frieda Lawrence*, 32.
9) Frieda Lawrence: *The Memoirs*,. 69. 以下, ウィークリーについての記述は, 同書 (p. 74 まで) による.
10) フリーダの書簡は, *The Memoirs* による.
11) Frieda Lawrence: *The Memoirs*, p. 81.
12) *The D. H. Lawrence Review*, Vol. 22, No. 2, 1990.
13) Frieda Lawrence: *The Memoirs*, p. 90.
14) Ibid., p. 85.

主要参考書

Janet Byrne: *A Genius for Living: A Biography of Frieda Lawrence.* Bloomsbury, 1995.

Martin Green: *The von Richthofen Sisters: The Triumph and the Tragic Mode of Love.* Basic Books, 1974.

Emanuel Hurwitz: *Paradies-Sucher Zwischen Freud und Jung.* Suhrkamp Verlag, 1979.

Mark Kinkead-Weekes: *D. H. Lawrence: Triumph to Exile.* Cambridge University Press, 1996.

Frieda Lawrence: *"Not I, But the Wind ….*" William Heinemann, 1934.

The D. H. Lawrence Review. Vol. 22, No. 2, 1990.

Robert Lucas: *Frieda Lawrence: The Story of Frieda von Richthofen and D. H. Lawrence.* Secker & Warburg, 1973. (ロベルト・ルーカス/奥村透訳『チャタレー夫人の原像・・・・・・D. H. ロレンスとその妻フリーダ・・・・・・』講談社, 1981年)

Edward Nehls: *D. H. Lawrence: A Composite Biography.* Vol. I. The University of Wisconsin Press, 1957.

E. W. Tedlock (ed.): *Frieda Lawrence: The Memoirs and Correspondence.* Heinemann, 1961.

Marianne Weber: *Max Weber: A Biography.* John Wiley & Sons, 1975.

John Worthen: *D. H. Lawrence: the Early Years 1885-1912.* Cambridge University Press, 1991.

Summary

A Biography of Otto Gross: Part 3

The Otto Gross--Frieda Weekley Correspondence

Frieda Weekley has played an important part in Otto Gross's life and work. She has embodied the vision of a new woman for him, as he calls her the 'woman of the future', while she herself is inspired by him with the courage to lead a new life. After getting married to D. H. Lawrence, she conveys Gross's ideas to Lawrence and provides him with a new perspective of life. In this essay an attempt is made to describe Frieda's earlier life in some detail and to trace the life of Gross and Frieda in the correspondence between them.